

ロマンティックに狙い撃ち

目次

ロマントリーックに狙い撃ち	5
ロマントリーックにはまだ遠い？	129
部屋と紅茶と三つ編みと	161
ロマントリーックをおすすめわけ	245

ロマンティックに狙い撃ち

突き刺すような視線を感じて思わず振り返った。そこには怪しい人影どころか、猫一匹すらいない。嫌な汗が背中を流れた気がした。都会の片隅、昼間なのにほとんど人の姿が見えないそこは、自分がいつも通る道だった。平凡な毎日だと思っていた。繰り返しされる単調な日々。でもそれは、今思えば幸せそのものだった。いつからこんな風になってしまったの？ その視線に気づいてから、もう随分経つ。最初は気にしていなかった。ただの気のせいだと。振り返っても、あたりを見回しても誰もいない。けれど、その視線が自分から外れることはなかった。困惑が恐怖へと変わったきっかけは植木鉢だった。突然目の前に落ちてきた、どこにでもあるような植木鉢。

大きな音を立てて割れ、破片が頬をかすった。微かな痛み手に手を当てる。そして、その指についた血をぼんやりと眺めた。見上げた先には何も無い。すぐ隣に立つビルの窓はどこも閉まっていて、これがどこから落ちてきたのかわからなかった。ああ、あの視線の人だ。わたしは漠然とそう思った。

「……あつぶなあ……」
自分の声でバツチリと目を開けた。窓の外はすでに明るく、太陽が部屋の中の温度をじりじりと上げていく。けれどわたしのからだは冷や汗でじっとり濡れているせい、部屋の空気を少しひんやり感じた。

「夢だから、痛くはないけど……」
つぶやきながら、タオルケットをからだに巻きつける。またこんな夢……
枕元に置いてあるのは昨夜眠る直前まで読んでいた恋愛小説で、内容もサスペンスには程遠い。なのに、こんな夢を見るなんて……。とはいえ、こういう夢を見るのは初めてではない。それどころか、実は結構多い。

毎回少しずつ違うけれど、共通していることは、命を狙われているってこと。こういう夢を見てしまう理由も何となくはわかっているんで、回避すべく寝る前に色々試してはいるものの、その成果は五分五分という感じだ。

枕元に置いてある目覚まし時計を見ると、アラームが鳴る時間を五分ほど過ぎていた。あれ？ わたし、いつ止めたの？

そんなことを思っていると、階段をトントンと上がってくる音がして、部屋のドアがバタンと開いた。

「みく、いつまで寝てるの？」

すでに一度目の洗濯を終えたらしい母が洗濯かごを持って立っていた。

「んー……あともうちょっと」

夢の余韻のせいかな、まだ起きる気になれなくてそう言うと、母はフンツと鼻を鳴らしてベランダへ行った。

もう、寝起きのこのウダウダした感じが気持ちいいんじゃない。

寝転がったまま天井を眺め、さっきまで見ていた夢を思い出した。

怖かったなあ。ホラーもサスペンスも苦手なのに。

どうせ夢を見るのなら、もうちょっとロマンティックな夢にしてほしい。

まあ、ロマンティックなことなんて現実にはほとんど経験していないから、夢に見ることも難しいのかしら？

でもそれを言ったら誰かに狙われることの方があり得ないよ……きつと。

二十五歳にもなって恋愛経験がほぼない……というのもどうかと思うけど。でもそれって仕方がないと思わない？

社会人になって三年目。それなりに仕事をしてそれなりに経験も積んできた。性格は自分でもなんだけど、大人しくて真面目だ。

社会経験はそこそこだけど、恋愛の経験値は底なしに低い。

はつきり言って男性が苦手なのだ。これにはもちろん理由がある。

それを思い出すと、今でも心がギリギリするのだけけど。

小学生のとき、やたらとイジワルをしてくる男の子たちがいたのだ。工作を壊され、プリントに落書きされ、休み時間には追いかけられた。あの頃何度女子トイレに逃げ込んだことか。

一番最低だったのは、その中の一人に、わたし自身が淡い恋心を抱いていたってこと。好きな人にイジワルをされるのは、幼心にもとても辛かった。

親や先生に何度も泣きついた。先生が繰り返しその男の子に理由を聞き、最終的には「面白かったからやった」と言われたけれど、当ても今もその理由はまったく理解できない。

当然のことながらわたしの恋心は完膚なきまでに砕け散った。男の子に幻滅したのもそのときだ。でも、そこで完全な男嫌いになったわけじゃない。

中高生の頃はサッカー部のキャプテンに憧れたし、大学時代にも格好良い男の子を見るとテンションが上がった。一度でいいからデートしてみたいとも思う。

それでも片想いが恋愛に発展することはなかった。理由は嫌になるくらい考えたけど、結局怖いのかな？　と思う。

傷つくのが怖い。

好きになるのが怖かった。

もしまたイジワルされたら？　裏切られたら？　それこそもう立ち直れない。

だからイマイチ踏み出せない。

いいなと思う人がいても、気の利いた行動もできず尻込みしてしまう。当然告白なんてしたこともないし、もちろんされたこともない。

容姿も普通だし、引っ込み思案だし、傷つくのを覚悟の上で異性に体当たりしようなんて思いもなかった。

わたしの小さなトラウマはしこりのように胸の奥にあって、何年経ってもわたしを臆病にさせるのだ。

だから、現実では味わえないロマンティックな気分は本の中で楽しんだ。

一番好きなのは学生の頃に貪るように読んだ少女小説だ。設定が古い感じがするけれど、そこが逆に気に入っている。主人公はたいてい何のとりえもない普通の女の子で、現実にはなかなかいそうにない最高の格好良い男の子がその子に甘い言葉をささやく。どこをどうしたらそうなるのか、突っ込みどころは満載だけど、本の中のヒロインに自分を重ねて、様々な男の子たちとロマンスを楽しんでいる。

小説は必ずハッピーエンドだし、わたしを決して傷つけない。

現実の経験不足を本で補うのもどうかと思うけど、今のところそれがわたしのストレス解消法だった。まあ、そのシチュエーションが夢に出てこないのは残念だけどさ。

ただ一つ問題なのは、本で得た知識は何の意味もないということ。現実に素敵な人がいても、わたしはきつと何もできない。少女小説のヒロインみたいに男の子の前で顔を赤らめることも、わざとらしくすっ転ぶこともできない。

わたしのロマンスは常に頭の中だけで、だからわたしの恋愛経験値は一向に増えないのだ。

永野みく、二十五歳。

仕事は順調。一般的な女性と比べるとロマンスは足りてないけど、恋がなくても人生ってそれなりに楽しめるんじゃないかと、悲しいかな、最近思い始めている。

社会人になれば世界が広がるだろうと思っていた。もしかしたら小説に出てくるような素敵な人が現れて、嘘みたいに自分が変われるんじゃないかと。

でも現実とは違って、格好良い人がいてもそこまでする気もおきない。

しかし、そんな「お話の中の人」みたいな人は滅多にいないと思っていたのに……いるものなのねえ。わたしの期待とは全然違うけれど、ある意味「お話の中の人」のような人が。

でも系統がちよっと違うのよ……

だからきつとこんな夢を見るんだろう。

「もうっ、いい加減に起きなさいっ」

部屋のドアが大きな音を立てて開いた。母の怒鳴り声で慌てて飛び起きたら、その勢いでベッドから落ちてしまう。

「……嫁入り前の娘が……」

母の呆れた声が段々と遠ざかっていく。

「……イテテ」

強打した腕をさすりつつ、朝からこんなギャグ漫画みたいなことしていたら、確実にロマンティックが遠ざかるわと、しみじみと思った。

2

都心にある会社までは自宅から電車で一時間ちよつと。満員電車には毎日うんざりするけれど、それを短縮しようと思ったら一人暮らしをするしかない。

できないわけじゃないけれど、やっぱりまだちよつと……と甘えたことを考えている。

とはいえ、一時間をぎゅうぎゅうの電車の中で過ごすのはかなり辛い。雑誌を読んだり携帯ゲームをしたりしている人もいるけれど、わたしの場合一点に意識を集中させると気持ち悪くなってしまうのでできない。

そこで頼りになるのはやっぱり妄想だった。

基本はまず好みのシチュエーションを思い浮かべる。大人の恋愛は経験がないから想像があまりできないので、もっぱら学生モノが多い。お気に入りの小説をそのまま自分に置き換えたり、ちよつとアレンジしてみたりする。

わたしの好みはいわゆる委員長とか生徒会長とか、つまりメガネの似合うインテリだ。小説に出てくる彼らは勉強もできて運動神経も抜群で、しかもイケメンだったりする。実際には、まあ、お目にかかったことがないけれど……多分いるところにはいるんだろう。

そういえば、中学のときに憧れたサッカー部のキャプテンは授業中だけメガネをかけてたなあ。インテリというか、リーダーシップの取れる人が好きなのかもしれない。

まあ、いいや。

わたしの立ち位置はどこにでもいる普通の女の子で、学級委員長に片想いをしている、としよう。学校での様々なイベントの中で、少しずつ接触を重ねていく。

文化祭や体育祭ではお手伝いを買って出たり、別の委員になってちよつとした会話をするようになったり……

『いつも手伝ってくれてありがとう』

夕焼けに染まる教室の中。文化祭を明日に控えているのに、まだ終わらない教室の飾り付けを二人だけでしていた。窓の上の方に飾りを貼り付けるため、彼が昇った脚立を支えていると、頭の上から彼の声があった。

見上げると、微笑んでいる彼の顔があった。
心臓がドキンと大きく鳴る。

『う、ううん。わたし帰宅部だし、暇だから……』
彼が脚立をゆっくりと降りてくる。床に両足がついても、わたしの手は脚立から離れなかった。だつて、何も持っていないかつたら倒れそうなんかもん。

『……手伝ってくれる理由は、暇だから、だけ？』
わたしの目の前に立った彼が小首をかしげ、少し楽しそうな口元を言った。メガネに夕焼けが反射して、表情がよくわからない。

『……え。それは……』
脚立を握り締めたまま言葉が続かないわたしの手に、彼の手が重なった。突然の温もりに思わず心臓が止まりそうになる。

『自惚^{うぬぼ}れていたのはぼくだけ……かな？』

重なった手がわたしの手を包むように動いた。
身動きのできないわたしを見て、彼がふふっと笑う。

『文化祭の前日に、誰もいないのはどうしてだと思っ？』
『……え』

『君と二人だけになりたかった、と言ったら？』
彼の言葉の意味が上手く呑み込めない。

目の前にいる彼が、いつもの穏やかな学級委員長ではないような気がして、思わず一步退^{しりぞ}いた。
『ダメだよ。ぼくをその気にさせた責任は取らなくっちゃ』
普段の彼からは考えられないような強い力で一気に引き寄せられ、あつという間に抱きしめられた。

『覚悟してね』

わたしの耳元で甘くささやきながら、彼は教室のカーテンを閉めた。

……ムフフフ……いいんじゃない？

流行^{はやり}の草食系かと思いきや、実は肉食系……みたいな。

やっぱりちょっと強引なのがいんだよね……なんて、思わずニヤニヤしていたら、目の前にいたおじさんにもすごい顔をされてしまった。

ヤバイ。

満員電車の中での妄想は危険だわ。下手すると変態に間違えられかねない。
やっぱりいつか絶対引っ越そう。

まだ訝^{いひか}しげな顔でわたしを見ているおじさんの視線を避けつつ、そう固く決意した。

都心の大きな駅で降り、十分ほど歩いた多くのオフィスビルが立ち並ぶ一角にわたしの職場はあ
る。

仕事は日用雑貨の企画・製作・販売で、今わたしが所属しているのは企画部だ。女性向けの雑貨
が主で、とてもやりがいがある。入社当初は営業事務の仕事をしていたのだけれど、前々から希望

していた企画部に去年ようやく異動できたのだ。

自分が携^{たず}わった商品が実際に店頭に並んでいるのを見るのはとても嬉しいし、感動的だ。成果が目に見えるとやる気も当然出てくる。

今一番の望みは自分で考えた雑貨を商品化することだ。まあ、それにはかなりの才能と努力が必要だから、そのためにもやはり現実のロマンスは封印すべきかもしれない。

なんて、言い訳ばかりしている間はやっぱりダメなんだろうね。

「永野さん、サンプル届いてるから持っていつてくれる？」

「あ、はい」

企画部の入り口近くで、ちょうど来た総務の人にビニール袋を渡された。渡されたサンプルは二つあって、一つは鮮やかな花柄のミトン。もう一つはカントリー風の小花が散ったカトラリーケースだった。

「ふふ。可愛い」

対照的な二つのデザインは、現在企画部で力を入れているキッチンシリーズだ。

こういった日用雑貨は新商品が常に出ている状態で、社内はサンプルで溢れている。企画部の社員は二十名ほどで、基本的には女性が多い。それでも室内は程よく散らかったままだ。

物で溢れた通路を進み、上司たちのデスクが集まっている場所まで行った。

「おはようございます。池田さん、サンプルです」

「おはよ、みくちゃん。サンキュ」

花柄ミトンのサンプルを受け取ったのはこの企画部の主任の一人、池田直樹^{なおき}さん。

池田さんはかなりのイケメンだ。なんとというか、背中に大量の星とバラを背負っている感じがする人。要するにキラキラした人なのだ。年齢は確か三十四歳。

ハンサムで女慣れしてて、誰に対しても気さくに声をかけてくる。なので、社内外を問わずガールフレンドが多数いるという噂。個人的にはあんまり馴れ馴れしいのはちょっと胡散臭い^{うさんくさい}……と思っただけで、見目麗^{みめうるわ}しいので見ている分には楽しい。

まさしく少女漫画に出てくるような人なんだよねえ。しかもかなりのナルシストだと睨^{にら}んでいる。

池田さんはビニールの中からサンプルを取り出すと天井のライトにかざすようにして眺めた。

「うん、いいね。やつぱりこのくらい華やかな色の方がキッチンに映えるよね」

池田さんはそう言うと、わたしを見てにっこりと笑った。

その鮮やかな花柄は池田さんによく似合っている。

……まあイケメンにミトンというのがちょっと笑えるところだけだ。

池田さんには悪いけど、わたし的には派手目の花柄よりも、もう一つの方が好みだったりする。ただ、これを渡しに行くのはちょっと、躊躇^{ちゅうちゅう}するのだけだ……

池田さんのデスクと少し離れた席に、かの人はいた。日当たりのいいデスクの上には、今わたしが手にしているカトラリーケースと同じ柄の、小花の散ったデザイン画やサンプル、そしてカントリー調のステーショナリーグッズが綺麗に並べられている。

一見可愛らしいその場所に、恐ろしいほど不似合いな人物が座っていた。

「と、東堂さん、おはようございます。サ、サンプルです」

目が合った瞬間、わたしの寿命が三十分は縮んだ……と思う。

「……おはよう」

その後無言で差し出された大きな手の上に、わたしは震えながらカトラリーケースをそっと載せた。

企画部のもう一人の主任、東堂孝行さん。池田さんと同い年で、主にカントリー風のデザインの商品を担当している。

東堂さんは何というか、……恐ろしい人だ。仕事ぶりがということではない。見かけが。

はつきり言って堅気には絶対に見えない。一九〇センチ近い身長、がっちりした体格。オールバックの髪。眼光は鋭くて、もうおっかないことこの上ない。

そんなわけで、社内でもこっそりとおつかけられたあだ名は「ゴルゴ」。いわずと知れた、某漫画の主人公で、スナイパーのあの人だ。

そう、ある意味お話の中の人……とはこの人のこと。

こんな強烈な印象の人はそういない。入社してしばらくは何も知らなかった。次第に噂話を聞くようになっただけ、実際ここに移ってから本人を見たときのあの衝撃……

何もされていないけれど、思わず逃げ出したくなった。

副業で殺し屋をやっていると言われても驚かない。むしろやってない方がびっくり、そんな感じの人。

仕事は完璧なのだけれど、無口で何を考えているのかまったくわからない。声を荒らげることも決してない。

ミスをすれば撃たれるぞ……とこっそり言われているのはもちろん冗談で、本当は無言で、じつと見つめられるだけだ。男女問わず大抵の人はそれだけで涙目になる。

ある意味撃たれるより嫌かもしれない。視線だけで相手の心臓を三十秒くらいは確実に止められるとわたしは思っている。

ゴルゴはサンプルを手にとって、眉間に皺を寄せながらしげしげと眺めている。

気に入らないのかしら……

日の当たるデスクで、可愛いものに囲まれているゴルゴははつきり言ってもものすごく異様に見える。彼がどうしてここで働いているのか本当に疑問だ。こういう雑貨が好きそうには、まるで見えない。

拳銃とかライフルとかを手入れしている方がしっくりくるのに……

軍人というより傭兵って感じがするのよね。一匹狼風だもん。

迷彩服とか着たりするのかしら？ でも体格がデカすぎて隠れようがないわよね。いや、でも意外と動きは静かで、一週間くらいは飲まず食わず寝ずで過ごせそうだし、音も立てずに敵に忍び寄ることもできそうだ。

というか、あのガタイで無言で忍び寄られたらサスペンスというよりもホラーじゃない？

森で熊に遭遇するよりびっくりだし、確実にやられちゃうわよ。

まあ、こんな感じで、普段少女小説しか読まないわたしでも、かなりハードボイルドっぽい想像をかき立てられる人なのだ。

「……もういいぞ」

低い声にハッと我に返ると、わたしをじっと見ているゴルゴと目が合ってしまった。

「は、はい。失礼しました」

お辞儀をしてからくるつと回れ右をして、急いで自分の席へ戻った。

ダメダメ、変な想像してたのがバレちゃうじゃない。

ああ、また寿命が縮んじゃうわ。

「みく。おはよー。ね、これどう思う？」

椅子に座るなり、目の前にデザイン画が現れた。振り返ると、同僚の柴田夏美しばたなつみが立っていた。夏美はわたしと同じ年で、入社当初から企画部にいる。絵が上手で、自分で詳細なデザインを起せる貴重な人材だ。

逆にわたしは絵心がありませんので、企画書を作るのには苦勞している。今も次回の企画会議に向けて新しいデザインを考えているけれど、なかなか進んでいなかった。

夏美が見せてくれた紙には、同じデザインの食器が色々描かれていた。

「おはよー。……可愛いねえ、一式揃えなくなるよ」

「ありがと。企画が通ったらご馳走するね。ところで、ゴルゴがまたこっちを見てるけど何かしたの？」

「えっ」

その言葉に恐る恐る振り返ると、確かにゴルゴがわたしを見ていた。見ているというより睨んでいるという表現の方が的確だ。

バカな妄想をしていたのがやっぱりバレてたのかしら？ と慌てて首を戻す。

「今日は何もしてないよ。サンプルを持っていっただけだもん」

今日はね、と頭の中で繰り返す。

なぜだかわからないけれど、ゴルゴに見つめられることが多い。見つめられるイコール怒られている……：ようなものだから、全然嬉しくないのだけれど。

でも何が悪いのかよくわからない。ここに移ってきて約一年。自分なりに頑張っていると思う。

そりゃあ、ちよつとしたミスはある。コピーを逆にしたり、タイプミスをしたり。

でもそれってそんな撃たれるようなことじゃない……でしょ。大きなミスだってまだしていないはずなのに。

幸いなことにゴルゴは何も言ってこないのです、もしかしたらただ単に気に入られていないだけかもしれない。それはそれで悲しい気もするけれど。

でもまあ、わたしもついついじっと見てしまうから、余計に目が合うのかも……

だって、仕方がないと思うの。怖いけど見たいものってあるでしょ？

もちろん面と向かって見るのは無理だから、こっそりなんだけど。

少女趣味な妄想をしやすい池田さんと違って、ゴルゴは少女小説というよりもハードボイルドか

Vシネマって感じだから、ゴルゴを見てるとついついそっち系の馬鹿げた妄想をしてしまう。それはそれで楽しいのだけれど、もしかしてそれがわたしの顔に出ているのかしら？

なるべく見ないよう気をつけた方がいいのかもしれない。

本当に撃たれたら嫌だしね。

そんなわけで、幸か不幸か今のわたしの生活はロマンスには程遠い。どちらかというとハードボイルドだ。怖いことは怖いけれど、この緊張感にも少しずつ慣れてきて、それなりに楽しんではいら……と思う。

願わくば、目が合っても寿命が縮まない程度には強くなりたい。

なんて、こんなことを考えてるなんて普通じゃないよね、やつぱり。

だからあんな夢ばかり見るのよ。

3

あの日以来、さらに強く視線を感じる。

どこにいても、何をしても感じる視線。

頬の傷がうっすらと白くなったあとも、恐怖心だけは消えなかった。

不安と困惑、恐怖がない交ぜとなってわたしを襲う。

どうして？

なぜ？

どうしてこんな状況になったのか、まったく理解ができなかった。

ただ平凡に暮らしていただけなのに。

どうしたらいいの？

わたしはいつたいたいどうしたら？

誰かに言うべきか……

いつもと変わらない夜だった。

歩きなれた家までの道。

人気のなさも、時々しか通らない車もいつもと変わらなかった。

ただ、その車だけはまっすぐにわたしに向かってくる。

ヘッドライトが眩しくて、そばにあった電信柱と塀の間に逃げ込んだ。

次の瞬間、電信柱までほんの数センチの隙間を空けてその車は走り去った。

吹かすようなエンジンの音がいつまで経っても耳から離れない。

からだ中が震え、塀に寄りかかったまま一歩たりとも動けなかった。

逃げなければ……

微動だにしないままベッドの上でバチツと目が開いた。

窓の外では小鳥がさえずっているけれど、目覚ましはまだ鳴っていないはずだ。

どうやら先日の夢はまだ続いているらしい。

……マジでそのうち殺されるんじゃないの？ わたし。

現実ではゴルゴに睨まれ、夢でも誰かに狙われ、これじゃあ心の休まる時間がないじゃない。

どうしてこんな嫌な夢ばかり見るのかしら？

毎日アホみたいな甘い妄想をしているのだから、それがちよつとくらい夢に現れてもいいんじゃないかと切実に思う。

妄想力が足りないのかしら？

あの悪夢に勝つためには、それを上回るくらいロマンティックが必要に違いない。

えいっと飛び起き、窓のカーテンをさつと開ける。朝の光が部屋中に満ち、眩しさに少し目を細めた。

それから部屋の隅にある本棚の前まで行き、棚に並んだ少女小説を片っ端から手に取って中身を確かめる。

砂を吐くくらい甘いお話がいい。

たとえ気分が悪くならうが、行き帰りの電車の中で読んでやる。頭の中を完全にお花畑状態にしてしまえば、悪夢に勝てるかもしれない。

ああ、でも迷うなあ。

どれもこれもそれぞれツボに入るシーンがあるんだもん。

チェックし終えた本を床に積み上げ、さらにページをめくっていると部屋の扉が開いた。

「……あなた、朝から何してるの？」

呆れた母の声が背中に突き刺さる。

「ちゃんと片付けなさいよ」

……これが二十五歳の女が朝一番に母親から言われるセリフかと思うと、とても情けない。

それもこれもすべて悪夢が悪いのよ。

「えーい、負けてたまるかあつ」

馬鹿馬鹿しいくらいにこぶしを振り上げ、そう強く決意した。

結局二冊の本を選び、他の本についていた書店でもらった紙のブックカバーを付け直して、通勤鞆に入れた。

ふっふっふ、これで悪夢ともおさらばよ！

……その自信が数日後には打ち砕かれてしまうなんて、そのときのわたしは想像もしていなかった。

梅雨明けの青空が広がっている。蒸し暑さにうんざりしながらも、夏がもうそこまで来ていると思うと少しわくわくした。

子供の頃、夏休みを待ち望んでいたのとは少し違うドキドキ感。特別何があるわけでもないけれど、季節が移り変わっていくのが好きなのだ。

まあ、変わっていくのは季節だけで十分だと思っただけ……

青空から目を戻し、わたしを含めた若手社員三人を集めた部長を見つめた。

「東堂さんと池田さんのサポートをしてほしいんだ。二つの企画を平行して進める予定だから、次の全体会議に間に合うように助手として手伝ってくれ」

主任の助手ですごいことじゃない？ と一瞬喜んだけど……よくよく考えるまでもなく、ゴルゴのサポートなんて恐ろしくてできないよ。

それなら池田さんの方がいいなあと思っただのに、部長はわたしの顔をじつと見て、

「永野くん、君は東堂くんね」

ときっぱりはつきり言い切った。

ガンと漫画みたいな効果音が頭の中で響き、目の前が一瞬暗くなる。

なぜ？ よりによってどうしてわたしがゴルゴなの……？

「お、早速よろしくな、東堂」

「……はい」

恐ろしいまでの重低音がいきなり背後で響き、思わず飛び上がって振り返る。すぐ目の前にあったのはスーツに半分隠れたネクタイで……そーつと顔を上げると、わたしを見下ろしているゴルゴと思いつき目が合った。

それは今までで一番近い距離。間近で見るゴルゴはやっぱりこの上もなく恐ろしくて、全身の血が一気に下がっていくような気がした。

ひーっつ。怖いっ、怖すぎるっ。

絶対無理よ、終わるまで寿命がもたないって。

その前にミスしまくって絶対撃たれるってっつ。

「よ、よ、よ、よろしく、お、お願いしますっ」

青ざめて震えるわたしの心を知ってか知らずか、ゴルゴは無言で頷き、さっさと自分のデスクへと向かっていった。

「頑張ってくれよ、永野くん」

妙に楽しそうな部長の声を聞き流し、足取りも重くゴルゴのあとをついていく。ちらつと見ると、残りの二人の男の子たちは明らかにホッとした顔をしている。経緯を聞いていたまわりの人たちは、何だか可哀想な子供を見るような目でわたしを見ていた。

何だか人身御供（じんみこぐ）にされる村娘になった気分だ。

「みく、背後に立つちゃダメだぞ」

夏美のささやき声ですぐそばから聞こえた。

ちらつと見ると、夏美の心配そうな……ではなくて、ものすつごく楽しそうな顔が見えた。

他人事だと思っ……

それでもグッと拳を握り、意を決してゴルゴのデスクへと向かう。

すでに座っていたゴルゴは、わたしが来るのを待ち構えるかのようにこっちを見ていた。その視線の鋭さに思わず足が竦（すく）む。

こ、怖い……、や、やっぱり無理、か、も。

動くことを拒否する足を何とか動かかし、ゴルゴの前まで行く。ゴルゴはわたしの目を見つめたまま、机の中から何かを取り出そうとした。

な、何？ も、もしかして……

「……これを」

低い声と共にゴルゴの腕がゆっくりと上がった。その手には銃が握られて……？

「ひいっ……」

撃たれるっ。

思わず一步後ずさり、両腕で頭を覆った。いつまで経っても聞こえてこない銃声に恐る恐る腕を下ろすと、書類の束を差し出したままわたしを見つめているゴルゴがいた。

「あ、……あ、あはっ……あはは、す、すみません」

アホか、わたしは。

本当に撃たれるわけではないですよ。

誤魔化すように笑うわたしを、ゴルゴが冷ややかな目で見ている。

ああ、また変なヤツだと思われたかしら……

「……とりあえず、この企画書を読んでおいて」

「は、はいっ」

不自然なほどぎくしゃくした動きで書類を受け取り、そのまま回れ右をして、よろよろと自分の

席へ戻った。椅子に座った途端、一気に力が抜ける。

大きくため息をついて机に突っ伏したわたしに、

「お疲れさま」

と夏美が声をかけてきた。

「思いつきりびびってたね」

少し笑いを含むその声に顔を上げる。

「だって……、本当に怖いんだもん。撃たれるかと思った」

「バカね、こんな真つ昼間に皆の前で撃つわけないでしょ」

夏美がケラケラと笑う。

そりゃそうだ、と思っただのもつかの間、一瞬で真顔になった彼女が、

「やるなら深夜よ」

と、低い声で言った。

「ちよ、ちよっと、やめてよお」

思わず半泣きになったわたしを見て、夏美がまた笑う。

「冗談に決まってるでしょ。……あら、ヤバイ、見られてるっ」

慌てて自分の席へと戻っていく夏美を見送り、恐る恐る視線だけを動かすと、こちらをじっと見ているゴルゴが目の端に映った。相変わらず鋭いその目は獲物を狙う猛禽類もうきんるいを思わせる。

この距離って確実に射程範囲内よね。

果たしてわたしは生きてこの仕事を終えることができるのだろうか。
この上もなく不安になりつつ、震える指で渡された企画書をめくった。

その日から、周囲が面白がるくらいビクビクする日々が始まった。不幸にも、机もゴルゴのすぐ近くに移動させられた。あの恐怖の宣託せんたくから数日が経つけれど、常にライオンと同じ檻に入れられたウサギのような気分だ。

サポートを始めてからは今までの仕事とは違い、パソコンを前にひたすら数字を打っている。苦手ではないけれど得意でもない。ブラインドタッチとも言えない怪しい手つきで、ポチボチとキーボードを叩いていたそのとき、

「エプロンのサンプルの納期を確認して」

「は、はいっ」

すぐそばから聞こえてきた重低音に一瞬からだか浮いて、そのはずみでキーを押し間違えてしまった。

この地獄の底から這い上がってくるような低い声にはまだ慣れない。

でも、助手の仕事をしてわかったのだけれど、ゴルゴは、見かけの印象とは少し違っていた。

ゴルゴの仕事ぶりはとても細やかだった。指示もとても明確でわかりやすい。同じような内容の仕事をしているのに、池田さんについた人たちは少々やりづらいと愚痴をこぼしていた。

雰囲気だけなら圧倒的に池田さんたちの方が楽しそうだ。ただ、それも池田さんが彼らを振り回

しているだけと言えなくもない。ゴルゴはそれとは正反対で、無駄なく黙々と作業をこなしていた。はつきり言って、サポートなんて必要ないんじゃないか……と思うこともある。

見かけは怖い。これは絶対。

けれどそれ以外については驚くほど充実している。

ゴルゴのサポートという仕事は、恐怖心さえなければものすごく新鮮で楽しかった。確かに面倒で大変なこともあるけれど、勉強になることも多い。費用を投じて製作するということはこういうことなのだとしみじみと感じた。

当たり前だけど、ゴルゴにはまだ撃たれていない。心臓の機能が停止しちゃうほど睨まれることもまだない。つまり、そこまで重大なミスはまだしてないってこと。

まあ、目が合うたびに寿命が縮みそうになるのは相変わらずだけど。

間違えた場所をまたポチポチと消して、入力をし直す。

「つと、納期の確認しなきゃ」

書類に埋もれた電話を探し、内線ボタンを押した。

からだを縮め、顔を隠し。

でもあの視線が追ってくるのはわかる。

どこまで逃げればいいのか？

何もかも捨てたのに。

視線だけに弄もよほばれ、子犬のように震える自分はなんて無様なんだろう。

それでも足は止められない。

雑踏に紛れて、ホッと息を吐いた瞬間、背中に何か硬いものが当たった。

びくっと震え、思わず立ち止まりそうになったわたしの腕を誰かが掴む。

そのまま引きずられるように歩いた。

こっそりと見ると、濃いサングラスをかけた黒ずくめの大きな男が隣にいた。

ああ、この人だ。

恐怖が全身を走った。

背中に押し当てられた何かにぐっと力が入る。

ここで終わってしまうの？

絶望が溢れ、思わず涙がこみ上げたそのとき、低い低い声が頭に響いた。

『もっと逃げろ。どこまでも、お前を追う』

ふいに背中に押し当てられたものの感触がなくなった。

同時に大きな男が雑踏に紛れて消えていく。

安堵と同時に蘇よみがえってきた恐怖に追い立てられるように、わたしはまた走り出した。
まだ終わらないのだ。

今度は生殺しかあつ!!

ゼイゼイと荒く息をつきながら跳ね起きた。

滲にじむ汗をタオルケットで拭ぬぐい、また頭からベッドに倒れ込む。

やるならもういつそ一思いにやってくればいいのか、なんて空恐ろしいことを考える。

でも、毎回毎回じわじわと追い詰められるくらいなら、さっさと殺されて違う夢を見た方がまだマシだ。

しかも今回はとうとうアイツが出てきた。見上げるほど大きくて黒ずくめの男。顔は見えなかったけれど、どう考えても……あの人だと思う。

ゴルゴと一緒に仕事をするようになってから、ますますリアルになっていく夢。恐怖心が積みもり積もってこんな形で出てくるのだろうか。

この前から少女小説を持ち歩き、電車の中はもちろん、寝る前もばっちり頭の中をお花畑モードにしているのに……ロマンスではゴルゴには勝てないのね。

「みーくーっ、ご飯できてるわよー」

階下から母の声が聞こえた。

うう、すぐ行かなければ、また小言を言われてしまう。

よく寝たはずなのにからだが重い。
よいしょっと声を出して起き上がり、大きなため息を一つついた。

お昼休みを夏美と過ごすのはほぼ日課みたいなものだ。外にランチを食べに行くこともあるけれど、今日はすぐそばのコンビニで済ませることにした。

ドリンク売り場のドアを開け、ペットボトルを取り出すついでに吹き出してくる冷房を顔に受ける。すぐ隣では夏美が頬にペットボトルを当てていた。

会社の近くとはいえ、ほんの少しの間でも炎天下を歩くのは辛い。コンビニの効きすぎるくらい強い冷房がちょうど良かった。

「こう暑いと食欲もわかないなあ、冷やし中華とかにしようかしら」

麺類の前で立ち止まった夏美の横で、悩んだ末わたしはサンドイッチを手を取った。パサパサするからどうかと思っただけ、今日は冷たいミルクティーをガブ飲みしたい気分だったからちようどいいかなと思っただけ。

「あ、ゴルゴだ」

夏美の声に外を見ると、コンビニの前の通りをゴルゴと池田さんが並んで歩いていた。うだるような暑さの中、スーツ姿の彼らはなんとも涼しげに見えた。

涼しげ……というよりゴルゴのまわりだけは絶対零度のようなのだ。というか、この暑いのに真つ黒なスーツってどうなの？ と心の中でさらに突っ込む。

「対照的だよね、あの二人って」

夏美の言葉に思わず頷いた。朗らかに話しながら歩く池田さん。ゴルゴはその横で黙ったまま足を動かしている。眉間にはいつもの皺が寄っていて、眩しいからいつも以上に険しい顔に見えた。

二人の進行方向にいる人たちが、避けるようにさきと左右にわかれていくのは笑うところなんだろうか。

天使と悪魔、そんな対照的な雰囲気の人々だけど、一緒にいることも多い。池田さんはゴルゴのことを全然怖がっている風ではないし、ゴルゴも嫌がってはいないみたい。

男の友情って不思議だわ。そう考えながらさらにデザートのプリンを選んでレジに並んだ。

会社に戻って空いている会議室の一角で昼食を食べたあと、飲み物がなくなってしまったので、夏美と別れて給湯室に向かい、置いてある冷水機の水を備え付けの紙コップに入れた。

その場で一口飲んで給湯室を出た瞬間、ドンと何かにぶつかった。

「キャッ」

わたしの悲鳴と水のこぼれる音が同時に響く。

恐る恐る顔を上げると、目の前の黒いスーツの袖とわたしの胸元に水が飛び散っていた。

ああ、夏なのに真つ黒なこのスーツはもしかして……視線を上に向けると、わたしを見下ろしているゴルゴがいた。

その瞬間、サーツと血の気が引いた。

ひえーっ、こ、殺されるっ。

「……す、すみませんっ、すみませんっ」

ああもう、こんなときに限ってハンドタオルを置いてきてしまった。確か給湯室にタオルがあったはず。

「ちよっ、ちよっと待ってください。今、タ、タオルをっ」

そのとき、慌てふためくわたしの腕にゴルゴの手がガシツとかかった。

「えっ？」

ゴルゴのもう一つの手が彼の背広のポケットに入る。

ま、まさか……、武器は銃だけじゃないの？

わたしの頭の中で飛び出しナイフがきらめいたのと同時に、ゴルゴがポケットからハンカチを取り出し、わたしの手に握らせた。

「……………」

「これで」

それだけ言うと、ゴルゴはさっさと歩き出した。

曲がり角でゴルゴが見えなくなった瞬間、わたしのからだから力が抜けた。ハンカチを握り締めたまま給湯室の壁にぐったりと寄りかかる。

「あ、あはは……そりゃあそうよね」

気の抜けた笑いが誰もいない廊下に響いた。

一体何をやってるんだ、わたしは。

会社の中で、銃だナイフだってありえないでしょ。想像力が豊かなのも考えものだわ。

でもゴルゴから渡されたハンカチを見た瞬間、わたしはまた固まってしまった。

それは生きな成りとチェックのPATCHワークのような生地しじの四隅に小さなイチゴが刺しゅう繍ゆうされている、はつきり言ってもものすごく可愛いものだった。

一瞬、自社製品のサンプルかと思ったけれど、ついていたタグを見ると、そうではないようだ。

な、なぜに、こんな柄のハンカチを……？

恋人のもの……だったりして？

ゴルゴに恋人がいるなんて聞いたこともないけれど、だって、彼が持つには可愛いすぎるでしょう。それにしてもこれほど不似合いな取り合わせってないわ。

イチゴとゴルゴ……ここはやっぱり笑うべきところなんだろうか。

それにしても、さっきのシチュエーションって思いっきり少女小説だったわ、なんて思ってしまったのは、普段からそんな妄想ばかりしているからだろうか。

相手が別の人ならちよっとしたロマンスが生まれていたかもしれない。だって、すごく定番でしょ。まあ、ゴルゴとわたしじゃ、Vシネマか新喜劇かって感じだったけれど。

相手がゴルゴだったからそうなったのか、それともわたしだからか。

ロマンスに限りなく遠い人間に、そうそうチャンスはないってことなのかな。

自分で考えた言葉にちよっと落ち込んでしまう。

胸元にこぼれた水はほんの少しで、この暑さならすぐにでも乾きそうだった。この可愛いハンカ

チで拭く必要すらない。それよりも彼の腕にかかった水の量の方が多かった気がする。

「ゴルゴ、怒らなかつたなあ。」

よくよく考えてみれば、ゴルゴがあらさまに怒ったところなんて見たことがない。無表情だからかもしれないけれど、本当は見た目ほど怖い人ではないのかもしれない。

そんなことを考えながら歩いていると、途中で池田さんと彼のサポートをしている二人にばったりと出会った。

「やあ、みくちゃん。調子はどう？」

池田さんはわたしを見るなり、いつもどおりの華やかな笑みを浮かべる。一瞬でその場が明るくなる、そんな笑い方だ。

「えっと、まあまあです……」

「困ったことがあつたら言うんだよ」

珍しく真剣な顔をしてそう言った次の瞬間、前から歩いてきた別の女性にフェロモン全開の笑みを向けると、お先にとつぶやいてさっさと消えていった。もちろんその女性も一緒にだ。

残された三人の間に微妙な空気が流れる。なんとなく三人で歩き出すと、その気まずさを打ち消すように一人が言った。

「永野さんは大変だよなあ、なんたつてゴルゴだもん」

それに同調するようにもう一人が頷く。

「ミスしたら消されるって本当？」

……そんなの嘘に決まってるじゃない。

まあ、わたしもほぼそう思っただけだけれど。

「まさか」

そう答えると、二人も納得したように頷いた。

「それでもあの顔を毎日間近で見なきゃならないのは苦痛だよ。あの強面こぶもてでよくこんな仕事ができるよなあ」

そうそうと半ば馬鹿にしたように笑う二人に内心イライラした。

すぐに女性と消えてしまう池田さんもどうかと思うわよ。どっちもどっちじゃない。

どうしてだろう……他の人にゴルゴのことを悪く言われると、ちょっとだけムカつく。自分だって散々怖がっているのに。

変なの、わたし。

「おっと、噂をすれば」

その声に反応して視線の先を追った。

ちらつと覗いた休憩スペースにゴルゴがいた。この暑い中、窓際がよく日の当たる椅子に座り、相変わらず難しい顔をして外を見ていた。

休憩スペースには他にも数人がいたけれど、誰も彼の半径二メートル以内には近寄らないようだった。みんな、息をひそめて遠巻きにゴルゴを見ている。

「あれはやっぱりどう見たって殺し屋だよ」

隣からこそ聞こえてくる声にまた少し嫌な気分になる。

その感情に自分でも少し戸惑いつつ、それでも……とイチゴのハンカチをぎゅっと握り締め、思いきってゴルゴに近付いた。背後から焦ったような気配を感じたけれど、さらに近寄る。

気配を察したゴルゴが視線をわたしに向けた。鋭い瞳に見つめられ、一瞬足が止まりそうになる。周囲からは息を呑む音が聞こえた。

「あ、あの……。さつきはすみませんでした」

ちらつと見たゴルゴのスーツの袖にはもう濡れた痕跡こんせきはなかった。

まあこれだけ直射日光に当たっていれば……真黒なスーツからは、今にも煙が出そうだ。

「ハンカチ、洗って返しますから」

そう言ったわたしにゴルゴが頷いた。

「……永野は、平気か？」

「は、はい」

上擦った声しか出なかったけれど、ゴルゴはまた頷いた。

頭を下げてから通路に戻ると、まだ二人がそこにいた。

「永野さん、すげー。あのゴルゴに自分から近寄るなんて」

「ゴルゴは野生の熊か。」

凄いやわれようだけれど、わたしも今まで同じように思っていたのだ。

でも……ずっと、誤解していたのかな？

見かけどおりの怖い人ではないのかもしれない。

三人で歩きながら、手の中にあるイチゴのハンカチをこっそりと見下ろした。

わたしの中でゴルゴの印象がまた少し変わった気がした。

5

赤外線スコープが自分を狙っている。

感覚だけでそれがわかるのは逃亡生活が長いからか。

息を殺して、闇に潜む。今動くわけにはいかない。

あとどれくらいだろう。どれだけ逃げ続ければいいのだろう。

涙と汗が混じり、埃ほこりだらけの頬を伝う。

あの男の気配を感じる。どこまでもどこまでも追ってくる気配。

まるでわたしを嘲笑あざわらうかのように、決して姿を見せず、ただ影のようにつきまとう。

逃げなければ……

その思いだけで疲れ切ったからだを奮い立たせる。

どうして？

常に頭の中に浮かぶ言葉。

なぜわたしは逃げているの？

ついこの間まで、幸せに暮らしていたのに。

平凡な日々は何の前触れもなく突然に終わりを告げた。

逃げなければ……

薄暗い路地の隅にうずくまり、朝が来るのを待った。

ハッと目が覚めた。窓の外は暗く、時計を見なくても朝までにはかなり時間があるのがわかる。一連の夢はまだまだ続きがあるようだ。そして日に日に悲壮感が増えてきている気がする。

いやいや、ちよつと待とうよ。

わたしが昨夜寝る前に読んだのは何だった？ 表紙を見せるのもちよつと躊躇しちゃうような、とつておきの一冊よ。出てきた男の子は強くて優しくつて、恥ずかしげもなく甘い言葉を吐きまくる乙女の夢の結晶みたいな人だった。

どうせ夢に見るならこういうのにしようよ。現実にはありえないんだから、夢の中ぐらい、いい思いさせてよ。

夢も現実もハードボイルドだなんて……わたしの心はいつ休まるの？

まだ時間はある。目覚ましが鳴るまであと数時間はあるはず。

妄想しよ、妄想。得意技だもん。

自分をヒロインにするなら、相手が高校生……つていうのはちよつと厳しいな。大人でイケメ

ン……を思い浮かべようとすると、どうしても池田さんが頭に浮かぶ。一番身近だからかな。

でも、池田さんは本当に煌びやかで、小説に出てくる男の子みたいに華やかで王子様みたいな人だ。今まではそんな人も素敵だなんて思っていたけれど、いざ現実に見てしまうとちよつと違うなつて思うの。やっぱり軽薄な感じがダメなのかな。気障なところもちよつとなーと思う。

実際にあんな風に始終煌びやかな人と一緒にいると、こつちも疲れちゃうと思うのよね。やつぱりお話と現実の違いなんだなあ。

いや、まあ現実にはわたしと池田さんがつき合う確率なんてゼロ以下だけださ。

いつでもドキドキしていられる関係はそれで憧れるけれど、でもどつちかっていうと物静かでそばにいるだけで安心できる人の方がいい。

そして自分だけに優しい人。程よく甘い言葉と優しい仕草。包容力があって……でもそれつて、うんと年上つてこと？

『みく、こつちにおいで』

なんて呼ばれたら、はーいつて子犬みたいにしつぽを振つていつちゃうわ。

甘い妄想を重ねているうちに意識が少しずつ沈んでいく。

わたしの頭の中で、甘い言葉をささやく人のシルエツトが段々と浮かび上がってきた。大きなからだがわたしを見下ろすように目の前に立っている。顔を上げて、相手の顔は逆光のようになっていて見えない。

シルエツトの腕がゆつくりと持ち上がった。その手には、この前お風呂場で大量の洗剤で洗濯し、

へたくそなアイロンをかけてから返したはずのイチゴ柄のハンカチがかかっていた。そして、シルエットの手がそのハンカチを払い……わたしの目の前に銃口が……

ゴルゴ!?

目覚まし時計とわたしの悲鳴が同時に響き、何かかと階段を駆け上がってきた母からまたぶつぶつと小言を言われたのは言うまでもない。

な、なんちゅー夢を見せるのか……

飛び出しそうな心臓を押さえ、せえせえと息を吐いた。

お、恐るべし、ゴルゴめ。

夢見の悪い日は気分が乗らないわ。

なんてことを思いながらひたすら資料を作っていた。数年分の書類を引っ張り出し、比較できるようにまとめ直す。

不況の影響からか、去年よりも低コストになるよう求められているみたい。素材選びから気を使わないといけないなんて、下っ端の自分は考えもしなかったことだった。

「永野、去年の原価表見せて」

「あ、はいっ」

一日数回は聞こえてくる低い声に、大慌てで堆く積まれたファイルの中から目当てのものを探し、数冊まとめてゴルゴのデスクへ持っていった。

「どうぞっ」

机の上に置き、戻ってまた続きを始めようとしたとき。

「永野」

「は、はいっ」

「……これは？」

「へ？」

間拔けな声を出しながらそばまで行くと、ゴルゴが一枚の紙を見ていた。

誤ってファイルの間に挟まっていたのであろうそれは、ピンク色のウサギが大きな桃を抱えているへたくそなイラストだった。もちろんわたしの手描きで、次回の企画会議に出せればいいなど漠然と思いついた時間で書き殴っていたものだ。

「ああっ、す、すみませんっ」

慌てて取ろうとしたわたしをゴルゴが制した。

「きみの？」

「ええっと、はい。すみません。間違えて挟まってしまったみたいで——」

「……これだけか？」

「え？ えーっと、はい、今のところは」

わたしの話を聞いているのかいないのか、ゴルゴはじっとウサギを見つめていた。

「……いいんじゃないか」

「え？」

「このまま続けて。企画を出すときにはもう数種類あった方がいい」

そう言うと、ゴルゴは紙を返してくれた。

「あ、ありがとうございますっ」

思わず大きな声が出てしまった。そばにいた何人かが何事かとばかりにこつちを見たけれど、気にならないくらい浮かれていた。

うわ、どうしよう、ものすごく嬉しい。

企画部に入ったときから自分のオリジナルのデザインが商品になればいいなと思っていた。でもそれはとても難しく、今まで何度もダメ出しをされ続けている。

褒められたのは初めてだった。

いくら恐ろしいとはいえ、ゴルゴは仕事面では尊敬できる上司だ。そのゴルゴに褒められた！

そのときのわたしは今にも小躍りしそうなくらい舞い上がっていた。

「みく、どしたの？」

席に戻ったわたしのテンションの高さに、夏美が怪訝けげんそうな声をかけてくる。

「褒められたっ」

「え？」

「これ」

驚いている夏美にだけ見えるように、こっそりとデザインを広げた。

「お、可愛いじゃない」

「続けてみなさいってゴルゴが」

「へえ、良かったじゃない。次の会議が楽しみね」

彼女の言葉に大きく頷く。

どんな小さなことでも、認められるってことはすごく嬉しい。

もう、ゴルゴってばいいところあるじゃない。

わたしの中で、ゴルゴのイメージがまた少しアップした。

元々定時きっかりに終わる職場ではなかったけれど、ここ最近はさらに遅くなっている。その日も午後八時を過ぎて、ようやく自分の仕事が終わった。

いつもならまだ数人は残っている部内だけれど、今日はわたしとゴルゴだけだった。こっそりとゴルゴの様子を見ると、パソコンを前にまだパチパチと手を動かしていた。

あの大きな手じゃ打ちづらそう。それに何だか……ちよつと帰りづらいじゃない。

「ゴ……と、東堂さん、あの……お手伝いしますけど」

思いきってその声をかけると、ゴルゴが手を止めて顔を上げた。一瞬驚いたような表情をしたように見えたのは気のせいだろうか。

「……いや、いいよ。これは別のだから」

そのとき、わたしはなぜか引き下がらなかった。一人でポツンと残っているゴルゴが、何だか少

し寂しそうに見えた……とか言ったら、夏美とかは大笑いしただけだ。

「簡単なものならやりますよ」

そう言ったわたしに、ゴルゴは少し考えたあと書類を差し出した。

「……これを、十部コピーしてもらえるか」

「はいっ」

受け取った書類を持って部屋の隅にあるコピー機に向かった。書類を整えながら、ふとその表紙を見て手を止める。

あれ？ これって……

ゴルゴから受け取ったそれは、紛れもなく池田さんの企画のものだった。

なぜこれをゴルゴが？ 池田さんもサポートの人たちもすでに帰っているのに。

疑問に思ったままコピー機にセットしてスタートボタンを押した。ちよつと型の古いコピー機がゴンゴンと音を立てる。次々と排出される紙を見つつ、横目でちらつとゴルゴを見た。

まだ何かを打っている。もしかしてアレも池田さんのやつなんだろうか。

残業までしてやっってるってどういうこと？

手伝ってるの？ それとも……やらされてるっていうのはないだろうしなあ。

と、そのときコピー機が止まっていることに気がついた。小さな液晶パネルにはエラーの表示が光っている。

「ええー」

何で？ しかもトナー切れだ。

よりによって残業中にトナーを替えることになるなんて……一番嫌いな作業なのに。

仕方なく備品の棚から詰め替え用のトナーを出してくる。外箱に書いてある交換方法を読みながら、トナーの容器をセットした。

……やり方が下手なんだろうなあ。

わたしがやるとどうしてもトナーの粉がどこかに飛び散ってしまう。数分後、何とか詰め替え、飛び散ったトナーをティッシュで拭き取ってから再スタートした。

うー、やっぱり手についた。

指先についた黒い煤すすのような汚れに、思わず顔をしかめる。仕方なく女子トイレで手を洗い、戻ってきたら、今度はちゃんとコピーが終わっていた。書類をソーターから一部ずつ出し、ページを確認してから揃えてダブルクリップで留める。

まだ熱の残る書類の束を抱え、ゴルゴの席へと向かった。

どうやらわたしがコピー機に悪戦苦闘している間に彼の仕事は終わったようだ。もうパソコンには向かっておらず、椅子の背にもたれて外を見ていた。

ヤバイ、待たせてる？

「す、すみません。お待たせしました」

慌てて書類を机の上に置いた。ゴルゴはゆっくりとからだを戻して、それを手に取る。

「……悪いな」

「いえ」

「今日はもういいぞ」

「はい、お疲れさまでした」

自分の席に戻り、帰り支度をした。窓の鍵とトイレの電気を確かめてから出ようとしたら、ビルの出入り口でゴルゴと一緒にしまった。

「……永野は電車か？」

「は、はい」

そう言うと、ゴルゴはわたしと並んで歩き出した。

……こ、これって駅まで一緒についてことなんだろうか……だよねえ。

遠慮したい気持ちは大いにあつたけれど、言葉に出す勇氣もなく……。仕方なくゴルゴと並んで駅までの道を歩いた。

き、気まずい。

何か話さなきゃと思うけれど、何を話せばいいのかまるっきりわからない。

ひたすら無言で気まずいことこの上なのに、ゴルゴはまるで気にしていないようだった。

しかも、この時間の駅前はいつもものすごく混んでいるのに、わたしたちのまわりには見事なくらい誰もいない。いや、いるんだけど半径一メートル以内には誰もいないってことだ。

まあ、ちよつと避けたくなる気持ちはわかるわ。だって見た目が怖いんだもん。

でも一緒になって避けられているわたしの存在ってなに？

そんなことを考えているうちに駅に着いてしまった。相変わらずわたしたちは無言のまま、揃って改札をくぐった。

どこまで一緒なんだろうか？ さすがに最後まで最後くらいは挨拶をした方がいいわよね？ なんて思いながらも、からだは勝手にいつものホームへと動いていた。

あつと、ヤバイ。挨拶しなきゃ。

そう思ったとき、ゴルゴがまだ隣を歩いているのに気づいた。

あ、あれ？

思わず顔を上げたわたしに、ゴルゴがさつと視線を向けた。

「電車も一緒みたいだな」

「……そ、そうなんですか」

そう言いつつ、内心はパニック状態だった。

えーっ、今まで知らなかったわよ。一緒の時間に帰ることもなかったし、ゴルゴの家なんて知らないもの。

案の定というか、ホームはすでに満員状態だったけれど、わたしとゴルゴのまわりだけはぼっかりと不自然なくらいスペースが空いていた。それは電車に乗ってもほぼ同じで、満員のせいかわしくは狭くなったけど、それでも半径三十センチは確実に空いている。

今まで満員電車が苦痛で仕方がなかったけれど、この状態はそういう意味ではすこぶる快適だった。

何、この楽チンな感じは!?

隣に立つゴルゴをそっと見上げる。眉間に皺しわを寄せ、じっと窓の外を見ている顔は何かを狙っているみたいでやっぱ怖い。電車の中でもいつもこんな感じなんだろうか?

そう思ったとき、急ブレーキがかかったのか、ガタンと音を立てて電車が大きく揺れた。急な動きについていけず、弾みでつり革から離れた手がゴルゴの腕をとっさに掴んでしまう。その瞬間、まわりからお馴染みの息を呑むような音が聞こえた。

「す、すみません」

離そうとしたけれど、揺れる電車の中では上手く体勢が立て直せなくて手が離せない。

「大丈夫か?」

低い声が頭の上から響く。そっとわたしの腕を掴んだ大きな手は思ったよりも優しくくて。

「すみません」

見上げると、わたしを見下ろすゴルゴの顔があった。相変わらず何を思っているのかわからない表情。それでもわたしを支えてくれる手つきは優しかった。

電車の揺れが収まり、ようやくゴルゴから手を離れた。つり革を掴み直したとき、ゴルゴの手がすつと上がって、指先がわたしの頬ほに触れた。

「……っ」

触れられた瞬間、心臓が大きく鳴った。思わず飛び上がりそうになったわたしに、ゴルゴは触れていた指先を見せた。大きな手と長い指。初めてじっくりと見たゴルゴの手はとても綺麗で、その

指先についていた黒い煤すすのような薄い汚れに違和感を覚えたほどだ。

ん? 黒い煤?

「あ……」

トナーだ。顔にまで飛んでいたとは。

いい大人のくせに、なんて恥かしい。

「……重ね重ねすみません」

「いや」

それからゴルゴが先に降りるまで、わたしたちはまた無言だった。

電車の窓ガラスには並んで立つふたりが映っている。大きなゴルゴと小さめなわたし。他人から見たらまるで接点が見つかからないだろう。

なんだか捕まった宇宙人みたい。

まわりは相変わらず不自然なくらい人がいなくて、ふたりの姿が余計に際立っていた。

なんだろう。すごく不思議な感じがする。

今までわたしがゴルゴに感じていたのは恐怖と、それから尊敬だ。今はそれに少しかだけ違う感情がまじってきた。

それが何なのか、今のわたしには上手く表現できない。

それにしても、これってお約束のシチュエーションなんだなあ。こういう場面は今まで何度も妄想に出てきた。だって定番中の定番でしょ。

わたしの妄想の中の理想の相手は学生服の男の子で、もちろん委員長だ。でもちょっと不良っぽいのもいいかなあ。

偶然同じつり革に掴まって手が重なっちゃったとか、よろけた弾みで抱きついちゃうとか……

『大丈夫か？』

急な揺れに思わずよろけたわたしの腰に彼の腕がまわった。華奢きゃしゃに見えたその腕は思っていた以上に力強くて、ドキドキが止まらない。

『しばらくこうしてな』

そうつぶやいて、さらに引き寄せるように力が入られ、抱きつくような格好になってしまう。

『は、恥ずかしいよ』

彼の胸に顔を埋めて、くぐもった声を上げるわたし。

『誰も気にしてねえよ』

『わたしが気にするの』

『……じゃあ、おれのことだけ考えてろ』

その言葉と同時に頭のでっぺんに彼がキスをして、ほんわかとした熱が伝わってきた……
なんてっ！

思わず赤くなった頬を両手で覆おおうと、窓ガラス越しにゴルゴとぼつちり目が合ってしまった。

ヤバイ、また変な子だって思われたかも。

思わずヘラツと笑ったら、さっと目を逸そらされてしまった。

……ああ、やっぱり怪しい顔だったのかしら。

でも妄想だけは広がるけれど、学生時代は自転車通学だったし、男の子を間近で見たこともほとんどないので、今までこんな機会ははずなかつた。

夢のシチュエーションにかなり近かつた相手がゴルゴというのはちょっと……だけど、少しだけときめいてしまったのも事実だ。

あー、もしかしてわたしってゴルゴ相手でもかなり妄想できるのかもしれない……

自分の守備範囲の広さを思いがけず自覚した夜だった。

『じゃあ、ここで』

『はい、お疲れさまでした』

先にゴルゴが降りてドアが閉まった瞬間、車内から緊張感が消えたのを感じた。でも、わたしが一人になっても、ぼつかりと空いたスペースは埋まらなかった。

ゴルゴといるときは平気だったのに、今はまわりからどんな風に思われているのか……想像するだけでも恐ろしい。

自分の降りる駅に着き、ドアが開くなりダッシュで電車をあとにしたのだった。